

特 114

442

梶川乾堂師述

常德

鎮海觀音會



始



特14
442



本書は大正八年十二月七日鶴見
總持寺に於て鎮海觀世音菩薩の
供養を行ひ併せて支那朝鮮關係
物故者諸士の英靈を祀りたる節
特に梶川乾堂老師に一揚の法話
を請ひたるものなり

大正九年十一月

鎮海觀音會

大正
9.10.24
内交

常 徳

梶川乾堂師述



例によりまして十句観音經の一部分をお話致します。前に五句だけお話申しましたから今度は第六句の中で常樂我淨といふ所がございます。其常といふ一字の意味をお話致します。是に徳といふ一字を附けまして常徳と申します、是は觀世音菩薩の徳の一つ、常住の徳、此事は涅槃經といふお經の中に詳しく言ふてあります、非常に難しい事でありませうけれども平易に御話し致します、喩へて申せば佛様のお身體は天上の月のやうなものである、天上の月は一つでありますけれども、若も下に水があれば清らかな水には悉く映る。大海にも映る池にも映る、乃至田にも映る、鹽に汲んだ水にも映る、手に掬んだ水にも映る、夫れのみか、草の葉の上に宿つて居る露にも

ちやんと映つて居る。丁度佛様のお徳は天上の月のやうなものであつて、衆生の信仰する者が、清浄な心で有がたいといふ信念を起すと同時に、佛様の精神が吾々の精神に宿るのである、それが何時でもです、昨日でも今日でも明日でも、或は人で言つて見れば女でも男でも、智慧のある人でも無い人でも、どんな人にも映る、此方に於て清らかな心を起して信心を致しますれば、どういふ人にも観音様が救済をして下さる。それが常住不変である、少しも變らない、それが常德、其事が涅槃經の中に斯う云ふ風に説いてある、大變長いものであります。其の中の一部を爰に出します。

歷三世而不遷、偶萬法而不變、故名常德(涅槃經)

前の譬で申せば、三世を歴て遷らず、何時でもです昨日は映つたけれども今日は御免蒙る、今日は良いけれども明日はいけないといふやうな偏頗はない、天上の月は清らかな水さへ持つて行けばどんな所へでも常住不變に映る、それが歷三世而不遷何時まで経つても變らない、それから萬法に混じて變せず、天上の月といふものは非常

な大きなものでありませうけれども、大海の水なれば廣々として宜いから映るけれども、ごうも草の葉の上に少し許ある所の露には、到底小さくて映れないと、そんな事は仰しやらない、草の葉の露でも、大海でも、田の水でも、清らかな水でさへあれば何處でも映る。それが萬法に混じて變せずです、大きければ大きいやうにちやんと映る、大海には非常に大きな月がちやんと映る、盪に水を汲んで置けば、又それに相當した月が映つて居る。其如くに、佛様のお徳は吾々の心次第、吾々の心がどんな大きな心でも、小さな心でも、清らかな信心を有つて、向ひさへすれば、必ず佛様の精神が吾々の精神と一致する、吾々の心の中に宿る、子供が信仰すれば子供の精神に宿る、女が信心すれば女の精神に宿る、老人でも子供でも、どんな人でも常住不變に吾々の心の中に映つて下さる、それが所謂常德である。過去でも現在でも未來でも西洋の人でも、朝鮮人でも、支那人でも、何處の人にも此佛の精神は常住不變に映つて来る、常住のお徳。併し常住と云つても、少しも變らないといふ事ぢやない、佛様は何時で

も一切衆生の心に應じて濟度して下さる、是が常德である。

それで何時でも申します通り、吾々が觀音様を信するといふ事は、吾々が觀音様に
なることである。如何にしたらば觀音様と同じ慈悲心を有つて、在ゆる人に對して其
慈悲心を施すことが出来るか、即ち如何にしたら吾々が常德を修養することが出来る
か、斯う云ふ事が涅槃經の中に説いてあります。先づ第一に吾々が佛様と同じやうに、
常住に慈悲心を起すことを修養するには、世中の無常といふ事を知らなければならぬ。
無常といふ事は既に皆さんが御承知の通り、此世中ははかないものである、朝露の如
く風前の燈火の如く、實に頼みにならぬ世中である、維摩經には此身は浮雲の如く須
臾にして變更す、丁度浮べる雲見たいなものである、何時どう變更するかも分らない
と言つてゐる。其位の事は誰も承知はして居るけれども、さて吾々は何時どう云ふ事
があるかもしれないといふ覺悟が、何時でもあるかといふとなか／＼無い、それは親戚
とか知己とか、或は隣家とかに不幸でもあつた時には、世中は實に果敢ないものであ

ると、ちよつと無常を感じることはあるけれども、さあ何かとなか／＼其心が
起つて來ない。それだから世中は實に果敢ないものである、決して頼みにならぬもの
であるといふ心が、始終起らなければならぬけれども、なか／＼それが起り難いから
して涅槃經を初として心地觀經、維摩經などにいろ／＼説いてございます。此所に書
いて置きましたのは涅槃經の中にある言葉で

壯年不久停、盛色病所侵、命爲死所、吞無有法常者（涅槃經）

壯年久しく停まらず、お互に若い積りで居るけれども、知らぬ中に年を取つてしま
ふ、どんな達者な人でも病に罹らぬとは保證は出來ない、盛色病に侵さる、況んや
吾々の壽命は限のあるものでありまして、決して千年も萬年も生きる事は出來ない、
六度集經の中に、例へば水の山より下るが如く、晝夜進むこと早くして須臾も止まる
事なし、身命の過ぎ去る事はより疾き事ありとあり。高い山の上から其逆様に水の下
ることは、一分間も息まない、どん／＼下つて來る、吾々の壽命は夫れよりも急がし

くあつて念々刹那々々に吾々は年を取つて居る、何時此一期のお暇をせなければならぬかも分らない。毎月此例會に觀音經を講義する時分に、其月に歿くなつた方の御回向を致します、多い時には五六人、少い時でも二三人は大概あります、觀音會に關係の深いお方はかりですら毎月それだけあります、自分達が斯うやつて達者で居るのが不思議な位である。

年月をいかで我身に送りけむ、きのふ見し人けふは無き世に。

あんなに人が死ぬのにごうして自分はまだ生きて居るのか知らぬ、と思ふ位昨日はお出でになつたけれども今日はもう亡くなつたといふ譯である。昨年此會にお出でになつたお方でも、亡くなつたお方は随分澤山ある、昨年は箕作博士もお出でになつて、あの時分にはなか／＼お達者なお身體であつた、それが今年はもう亡くなられて居る。知つた人とか縁者の死んだ時ばかりでない、吾々は常に此人間は何時か死ななければならぬといふ、無常觀といふものを是非持つて居らなければならぬ。さうして釋尊

ばかりが無常觀を人にお勧めになつた譯でもない、支那の聖人でも澤山勸めて居る孔子が川の流に臨み逝く者は斯の如き晝夜を捨てず、と申された杜甫の詩の中に人生七十古來稀なりとある。白樂天の言葉にも、百歳之人人間百に一無し、全く百歳にならぬといふ人は百人に一人も無い、此事は平常吾々がよく注意して居らなければならぬ。雍門周といふ人は春秋戰國時代に非常な琴の名人であつた、雍門周が琴を弾すると人がそれに依て感動する、人の心を自由自在にする位の非常な名手であつた。此人があの時代の孟嘗君、孟嘗君といへば三千の食客を常に養つて置いたといふ、非常な豪傑であつた、其孟嘗君の處へ参りますと、孟嘗君が大變喜んで、お前は琴が非常に上手だといふ事であるが、今琴を弾じて私の心を悲しましめ憂へしめて呉れないか、と斯く申しますと、雍門周答へて、君は天下の四君の御一人で在せられる所の貴所のやうな立派な方を悲ませるといふ事は、到底私の腕では出来ませぬ、琴を弾ずることには御免を蒙りたい、併ながらお話を致しませう、貴所が千秋萬歳の後に、段々時が遷

り物が改まり、世が變つて、子孫も段々遠くなつて行つて、あなたのお墓は段々古くなつて、お墓に立て、ある所の立派な御廟は悉く摧けてしまひ、あなたの爲に立てた所の碑文は悉く磨滅して、もう字も讀めなくなつてしまふ、そのみならず遊はすつかり草原になり、荆棘で一ぱい埋つて居る、毎日蒨草童や樵夫などが其處で遊び戯れて居る、さうして其樵夫たちが話をして居る、己れ達の今一服吸ふて居る所は昔孟嘗君といふ豪い人の墓であるといふことだ、孟嘗君といふ人は、其當時天下の四君の一人で財寶庫に充ち、家には三千の食客を置き、大厦高樓金玉を縷めてお出でになつた、食には山海の珍味を並べ、身には綺羅錦繡を纏ふて、毎日音楽を奏し、宴遊に日を送り、非常に人の羨むやうな境涯であつた、さういふ孟嘗君のお墓も、一旦死なれてから五百年千年と經つと、斯う云ふやうな有様になるものである、世中といふものは儂ないものであると、今から千年も萬年も後に、さう云ふ話を致す者がありましたら、どうでありませうかと言つてお話をしました、さうすると孟嘗君は覺え

ずほろりと涙を落した。といふ事が劉向說苑といふ書物にありました、世中には多くの事に例外といふものは随分ある、普通規則に當儀らぬ事が澤山にありますけれども、凡そ生を享けて生きて居る者は、必ず死なければならぬといふ事だけは例外はない、どんな人でも此規則には外れる事は出来ないものである。それだからして古來の聖人賢人と言はれるやうな人も、此世中は浮か／＼して居れば、何も成す事なくして死んでしまはなければならぬぞと云つて戒めて居る、誰も知らぬ事かといふと皆知つて居る、知つて居りつゝ其處に氣が付かないのである、それだから氣を付けよといふ。千年も萬年も生きる氣になつて居るから強慾をかはき、或は我見を貫かうとする、それは皆此の無常といふ事を知らぬからのことである。古人の歌に

はかなしと世のことわりしは知りなから行末をのみなはたのむかな
今斯う我見をはつて、慾をかはいてやつた所が、何れ無常のものであるとは承知して居りながら、尙我見を出し、無理な慾をかはくのである。

こゝろえて居なからすべる雪のみち
 自ら承知して居りながら尙々我見が出て来る。昔佛在世の時分に羅闍祇城といふ所がありました、其城内に一人の舞姫があつた、蓮華といふ名である、此人は所謂絶世の美人でありましたから、それを招ぶ人が多くて、大臣の子弟を始め、在ゆる人が大變に此舞姫を愛して居つた。所が此蓮華女が生れ付非常な志の良い女であつて、或時獨り考へた、何時まで斯うやつて居ても同じ事である、今は釋迦牟尼如来が耆闍崛山といふ所で説法をなさつて御出になる、自分も何時死ぬかも分らぬから是から耆闍崛山へ行つて比丘尼にならう。斯う考へて、自分の居る處をこつそり逃出して、耆闍崛山の方へ進んで行つた、段々と参りまして山の中へ入つて、大變口が渴いたから水を飲まうと思つて、泉の側へ来て水を飲んで、ふと水面に映る自分の顔を見た所が、自分の髪は紺青色を帯びふさふさとした如何にも立派な髪である、花のかんばせ月の眉といふが如く、自分乍らほれくとするやうな立派な顔付である。そこで又考

へ直した、是程立派な顔を有つて居つて、あたらし尼僧になつてしまふのは惜しい事である、やはり是迄の通り浮れて世中を過さう。斯う又考へて其處から後へ戻らうとする、向の方から自分よりも二つ三つも年少であらうと思ふやうな、それこそ自分以上の絶世の美人が来た、どうも斯う云ふ山の中へ斯う云ふ美人が来るのは不思議だと思つたから、其側へ行つて問ふて見ると、實は私は羅闍祇城の長者の娘である、花を探らうと思つて大勢の家來を連れて山へ来たのであるけれども、餘りに自分一人深く入つて探して居た爲に、路に迷つて終にこんな方へ出て来たのである、是から又羅闍祇城へ歸らうと思ふが、どうか路を教へて貰ひたいと云ふ。蓮華女は固より路を知つて居るからそれでは私と一緒に参りませうと云つて、共に城の方へ歸らうとする。後から来た若い美人が言ふには、私は大變口が渴いたから水を飲みたい、何處か此邊に水が無いでせうかといふと、先刻自分が飲んだ所がありますから、それでは彼處へ行きませうと行つて、其清水の所へ連れて行つて水を飲ませた。其所で一休みし

て二人で四方山の話をして居ると、其中に其後から来る娘が、何だか心持が悪いから、失禮ですが少し休ませて頂きたいと言ひます。そこで蓮華女が膝を貸してやりまして、膝を枕にして其娘さんが横になりますと、僅の間に非常に苦悶をして、終に其儘倒れてしまつた、まだそんな事はなからうと思つて、種々介抱をして居る間に、段々唇は眞蒼になつて来る、顔も土色になつて、段々膨れたり、或は爛れたりして、實にどうも見るに見兼ねるやうな穢い姿になつた。そこで蓮華女が初めて氣が付いて、是は驚いた、自分よりも綺麗な若い此娘さんですら、こんな姿になるのである。況や自分のやうな者は、勿論是よりもつと醜い姿になるに違ひない、自分が歸らうとしたのは大に悪かつた、と云ふて、急に釋尊の許に教を乞ひに行つた、さうしてどうく比丘尼になつた、其時に佛様が、總て若い者は年くふぞ、幾ら達者でも死ぬのだぞ、會つた者は何時か離れる時があるぞ、財寶を集めれば又それが離散する時があるぞ、斯う云ふ三つの説法をなさつて、終に此蓮華女は阿羅漢果を證つたといふ事が法

句經に説いてあります。即ち此世中は無常である。吾々が此世中の無常の道理を眞に徹底的に悟る——一時ぢや、駄目です、永久に此道理が悟れて、それが平常の行ひの上には現はれて、ナニさう欲張るものではない、さう人に意地悪くするものではない、何時此世にお暇をせぬければならぬかも知れぬ、斯う云ふやうに無常といふ事を根底にして常に氣を付けて参りますれば、必ず立派な境涯が其處に現はれて来る。平常の心の上に、世中は無常であるといふ念が始終離れないで居るならば、決して無理な事は出来ない、又其精神さへあれば、必ず肉體上に於ても非常に達者になる、自ら壽命も長くなる、何故ならば、先づ第一に我々の身體が何時亡くなるか分らぬとして見れば慾もかばかない、利の爲に醒醒しない、自ら精神が穏やかになつて来るから、自然壽命も長久になつて来る。釋純陀といふ人がある、是は印度の人でありますが、宋の世に長安に來た。此人はちよつと見ると子供見たいな顔付をして居るけれども、既に印度に非常に長い間居つて、それから支那に渡つたのでありますから少くも百歳以上

である、當人に向つてあなた幾つですかと云へば、私は六百歳だと言つて居る、六百歳といふ事はどうか知らぬが、確に百歳以上百二十歳であらうとは多くの人の認めて居る所である、ところが其人の舉動といひ精力といひ、若い者と少しも變らない、そこで宋の太宗が大變に歸依して、宮中へ純陀を召して、斯う言つてお問ひになつた、あなたは大層な年を経てお出でになつても、一向年寄らないで居られるが、斯う云ふやうに長生する術はどうしたら宜しいかといはれた、すると純陀が答へて

心神好静今爲塵境一汨之何從冥寂平若離簡靜外欲望留年如登木采芙蓉其可得乎陛下欲長年一由簡潔安神安則壽永寡欲則身安術斯已往貧道所不知也（宋高僧傳）

人間の本性素と清淨無垢で落附いたものである然るに見聞覺知の爲めに其本性を汨し心身を勞して天然の壽を全うすることが出来なくなり天性の質素清淨を離れて長命ならんとするは木に登りて蓮華を探らんとするが如きものであります。

あなた長生をしたいと思召さば、簡潔に由て神を安んせよ、簡潔は質素にして心を清淨にして居れば、自ら精神が安穩である、精神が安穩なれば従つて壽命が延びて來る、慾少なければ身安し。非常に慾をかへくから非常な苦がある、慾が少なければこそ身が安し、少慾知足、是より外に長生の方法はありませぬ、斯う云つて答へて居る。此質素にして心を清淨にするには、どう云ふ事が一番早道であるかと云へば、前に申ました所の無常を感ずることである、道元禪師が學道用心集の中に斯う云ふ風に説いてあります。

誠觀ニ無常一時、吾我之心不生、名利念不起、恐怖時光之太速（學道用心集）

無常觀といふのは一番結構である、無常觀を觀する時には、吾我の心生せず、即ち我見が起らない、従つて物に無理をしない、安穩である、名利の念も起らない、利とは自分が物を欲しいと云ふ利慾即ち名譽とか利慾とか云ふやうな事に心を奪われない、さうして時光の甚だ速なることを恐怖す、折角此世に生れて來たならば、何と

かして世中の爲になる事をしたいものである、縦令一日でも長く生きたならば、それだけ世中の爲にしたいと云ふ立派な精神が起つて来る。どうせ死ぬものだから、死ぬまでにごうか世中の爲に働きたいと云ふ、立派な精神が起つて来る、それが證故に「人の將に死せんとするや其言好し」と諺にも云へる如く「命はないと決心が出来ればドンナ悪人でも善心に立歸る者である。」

して見れば何時でも臨終の間ざわと同じ精神を繼續して居れば悪心、貪慾や妄想の起きやう筈はない即ち是れが無常觀の徳であります。

唐の順宗皇帝が佛光の如滿禪師といふお方にお問ひになつた事がある。印度にお生れになつた釋迦牟尼如來は淨梵大王の太子でお出でになつて、出家なされて三十歳の時に悟をお開きになり、四十九年の間一切衆生を濟度なさつて、所謂八十歳を一期として娑羅雙樹の下におかくれになつたのである。然るに釋迦牟尼佛のお説きになつた法華の所謂常在靈鷲山とあつて釋尊は常に靈鷲山に御在にて説法して居るぞ。と云

ふてあるそれでは矛盾ぢやないか、自分は死んでしまつて、常に靈鷲山に居りて説法して居るぞ、一方では生きて居ると云ひながら、一方では死んでしまつたぢやないか。斯う云ふ風に法華の文に付て順宗皇帝が如滿禪師に問を出された。其時に如滿禪師の答が佛の御身といふものは虚空のやうなものである、虚空といふものは出來たこともなければ無くなつた事もないのである、佛の徳は一切衆生の種類に應じて形を現することは水中の月の如しである、前に申したやうに衆生の心が清淨なれば必ず其處へ月が映つて来る、月が映つたからそで佛様が出來たかといふに、別に天上から水中にお入りになつた姿もない、又水が無くなつて月が無くなつたから、月が水から出てお出でになつたかといふに、別に出てお出でになつた姿もないのである、故に佛は丁度水中の月の如く、來ても來た姿がない、去つても去つた姿がない、だから佛様は如來といふ、來るが如し、來ても來た姿がなく、去つても去つた姿がないから常住不變であります。それでは天上の月と水中の月とは全く別か、別ぢやない、天上の月が

そつくり水中の月になつたのである、恰度吾々の心に精淨な心が起つた時が佛様と一致した時なのであつて、吾々の心と佛様の心は別かといふと別ぢやない、吾々の心が即ち佛様の心で全く一つであつて、而も其心が常住不變に起つて來れば、それが常住の佛徳と申すので夫れが法華經に説いてある常在靈鷲山であります。此常住の佛徳を養ふには無常といふ事を觀念するが一番宜しい、一切衆生をどこまでも變らずに濟度したいといふ精神は、先づ無常觀から先へ入らなければならぬ、故に佛徳のことは矛盾とか反對とかの議論に亘る可きものでは無常の釋尊の入滅が即ち常住の御說法となつて居る其如く吾等の無常觀が直に常住の佛徳を顯すのでありますと御答になつたれば順宗皇帝は非常に御満足にお思召したとこのことが宗門統要に出て居る。佛敎で言ふ所の常住とは無常其儘で常住なので常住の上にある無常であります、此有様は到底信仰の無い者では分りません其消息を次の公案で了解ください。

風穴禪師、僧問、如何是常住法、身師曰、金沙灘頭馬郎婦。

或る僧が風穴の延沼禪師に何時でも變らずに居る佛様は何處にお出でになるかと問ふたらば、延沼禪師が金沙灘頭の馬郎婦とお答になつた。此馬郎婦の事は、觀音經の講義の時分にお話したことがあります、尙お聞きにならぬ方もありますからお話しします、唐の憲宗の元和年中に陝右といふ町があつた、其處は大變風儀が悪くて、信心など一向しない所であつた。或時に其町に一人の大變に綺麗な女が参りました、さうして魚を賣つて歩いて居る。其れで其町の青年達は皆嫁に欲しがつて、いろ／＼と話かけた。すると其女が、實は私もどうか嫁に行きたいと思つて居ります、併し私には一つの望がある、其望が叶ひさへすればどんなお方の所へでも参ります、斯う言ひますから、皆が寄合つて、それぢやどう云ふ望であるかと言ひますと、其綺麗な魚賣の女が云ふには、今晚一ばんの中に觀音經一卷を暗に覺えて來る人があつたら、其人の所へ嫁に参りませうと云ひますから、若い者が大勢寄つて、一晚の中に一生懸命に觀音經を練習した、そして翌日其娘の所へ参りまして、皆觀音經を讀む、百人も居り

ましたけれども、段々途中でつかへて旨く讀めない人が出て来た、纔やく二十人だけ本當に完全に暗で讀めた。其時に娘が、まさか二十人に一人の嫁が行く譯には参りませんから、もう少し何か撰ぶことに致しませう、金剛經といふお經があるが、あのお經を今晚中に覺えて来た方の所に改めて嫁に行きませう。斯う言ひますから、今度は又其二十人の者が、金剛經を一晚の中に一生懸命に稽古して来た。翌日娘の所へ来て金剛經を讀みます所が、随分同じやうな所のあるお經ですから、暗で讀むのは容易な事ぢやない、それでもやつと拾人だけ立派に讀んだ。そこで其婦人が言ふには、いくら何でも十人の所へ一人の女が行く譯にいきませんから、もう一つ試験を致しませう。今度は法華經といふのは八巻あります、其法華八巻を三日間の猶豫を與へますから、全部暗で讀んだ方があつたら其お方の所へ参りませう。サア大變な事になつたけれども、どうかして此きれいな娘が貰ひたい爲に、一生懸命になつて若い者がお經を習つた。さて三日經つてからやつて見ました所が、誰も皆悉く讀めなかつたけれども、只

一人馬氏の息子が立派に讀んでしまつた。それでは貴所の所へ嫁に参ることにしませうといふので、黄道吉日を選んで愈嫁に行くことにした。そして所謂結婚式を擧ぐやうとする時分に、其娘が急に病氣になつて、忽ち歿なつてしまつた。それで仕方がないものですから泣く泣く其れを葬つてしまつた所が、其後何所からか老僧が一人現はれて、お前の所へ嫁に来たあの娘は、お前達は知るまいけれども、あれは此土地が餘りに善くないものだから觀音様が此土地をば教化せんが爲にお出になつたのであると、教へて行つたといふ事がある。其教化した娘の事を馬郎婦といふ、馬郎婦は教化了ると直ぐ死んでしまつた、是が常住の法身である。常住の法身といへば、死ぬことも何もなく、永久に其處にお出になる人と思ふと大遠ひ、衆生教化の爲に死に、衆生教化の爲に生きる、斯ういふのが常住法身である。常住とは何時でも死なずに居るといふことぢやない、吾々が若し死んでも、教化の爲に死に、教化の爲に生きるといふ事になつて来ると、それが常住の法身である。

散れば咲きさけばまた散る春毎に花の姿が如來常住。』
 大慈悲心を起して衆生を教化し、死ぬる時にも大慈悲心を持つて死ぬ、先達井之頭
 で小學教師が子供を救はんが爲に歿くなつた、あれは全く教化の爲に身を投げて居る
 犠牲になつたので、斯う云ふのが則ち常住の法身。吾々が本當に此無常の觀念を平常
 に起して、どうかして世中の爲になりたいと云ふ精神さへ起れば、それが如來の常德
 であります。

爰に皆さんに刷つてお上げしたのがありますが、是は元の仁宗皇帝の延祐年中のこ
 とでありまして、天目中峰禪師といふ非常な大徳があつて、其頃の王公大臣を初め悉
 く此天目中峯禪師に歸依して居つた。中にも鮎馬大尉の藩王、何れ皇族のお方であつ
 たに違ひない、此お方が大變に中峯禪師に歸依して居られた、此は其藩王の爲に、中
 峯禪師がお説きになつた垂示の一節であります。皆さんお讀みになればお分りになら
 うと思ひますが、之をお作りになつたのが延祐六年のことであつて、それよりも六年

前ですから、延祐元年の頃でせう、六年程前に中峯禪師の許に此藩王といふ皇族が手
 紙をお出しになつて、どうか私は陛下のお許の出次第に、此都から普陀洛山の觀音様
 に參詣して、それからあなたのお出でになる天目山へも是非お訪ねしたいと思つて居
 る、斯う云ふ手紙をお寄越しになつた。

記六載前、伏承大尉藩王書幣下逮、謂得旨南來首渴補陀、次登天目上

斯う云ふ手紙をいたゞいた、それから六年たつて後の今日、藩王の一行が杭州から
 普陀洛山へ登つて、所謂鎮海寺の觀音様をお拜みになつたといふ使者が來た。

今年之夏、忽聞、王車從至杭、繼臨海岸親見十二面滿月慈容於潮音洞裏
 十二面滿月の慈容とは觀音様のお姿を言ふ、即ち觀音様のお姿が丁度月のやうだと
 いふので、月は年に十二面ありますから、十二面滿月の慈容といふ、潮音洞裏といふ
 いふのは、鎮海寺の觀音様は潮音洞といふ所にある、其潮音洞に親しくお拜みなさつ
 たといふ事を聞いた。

約ニ山僧見處、又却不_レ然、其觀世音聖相、當_下數年前最初發ニ一念ニ時上、而滿月慈容、當處與ニ王之兩目ニ如_レ鏡照_レ鏡、自_レ爾凡舉ニ一念ニ則一觀音示現、舉ニ百念ニ則百圓通現前、所現之聖容、隨ニ念起處、竟莫_レ知_レ幾千萬身

自分が考へて見れば、今日藩王が初めて補陀洛山に行つて觀音様をお拜まれたといが、私はさうぢやないと思ふ、藩王がどうか觀音様に參詣したいと云ふ志の起つた時が、實際に觀音様を拜んだ時である。觀音様は有_レがたい佛様であるから拜みたい、どうかして補陀洛山へ參詣したいといふ、其最初の一念が即ち觀音様である。鏡の鏡に對するが如し鏡と鏡と對すれば、ごちらも影は映らぬ、丁度其如くに、觀音様に參詣したいといふ心が起つた、其心が直ぐに觀音様の心である、觀音様の心と自分の心と二つはないのである。それから六年間といふものは、早く勅許を得て補陀洛山へ參詣したいものであると、始終それを思つてお出でになつた、其一念毎に觀音様が現はれてお出でになる、一念其心を起せば一體の觀音様である、百念其心を起せば百體の

觀音様百千萬念を起せば百千萬體の觀音様がそこに現はれてお出でになるのである。だからあなたは初めて此觀音様を補陀洛山へ來て拜んだとお思ひになるかも知れませぬが、そうぢやない、もう已に殊勝な御心の起つた時に觀音様をお拜みになつたのである。それから又あなたお一人がお拜みになつただけぢやない。

豈特王心爲_レ然自_下車從離_ニ京師_ニ之日自_レ北而南_ニ三千五百里_ニ驛程_ニ、若聞若見、俱使_下知_{有_ニ補陀巖_ニ人人心中_ニ皆具現_中觀世音菩薩之慈容_上}

今度藩王が都を發して、大勢のお供をお連れになつてお出掛になる、それは何の爲にお出掛になるかと云ふに、補陀洛山に御參詣になり、それから天目中峯禪師の許へ參禪にお出でになるのであると云ふことが、已に其途すがら何處でも知れて居る、丁度都から天目山迄三千五百里もある、其間に藩王が大勢の臣下を連れてお通りになるのを見て、今度補陀洛山の觀音様に御參詣なさる、實に結構な事であると、口々にそれを言ひ、それを見たり聞いたりする者が、皆自分々に觀音様は有_レ難いといふ念

が起つて、観音様が現じて居る、補陀洛山に有難い佛様が在るといふ事を人々の心中に現する、其有難いと思ふ心が即ち觀世音菩薩だから、皆具さに觀世音菩薩の慈容を現せしむで、自分一人が觀音様になつたのぢやない、歩く途々の人から、家の者から供の者は勿論のこと、皆悉く觀音様の有がたい姿を自分々々の心に浮べることが出来る。

此又豈數量可レ知耶レ如レは無利不現之身、皆含ニ裏於王之最初一念ニ而其應現又不止ニ於今日ニ將レ見下亘ニ百千世後、傳ニ王之躬詣ニ補陀巖、使ニ觀世音自在神通光明ニ世々増長

是は又大變なものである、高貴な方だから、それを見たり聞いたりする人が、悉く其精神が起るのですから、其數量知るべけんや。而も今日此瀋王之信仰が世中に行渡つたばかりぢやない、未來永劫何時の世になつても、瀋王が此志を起したといふ事を見たり聞いたりする者がやはり、悉く觀音様の信仰を起すのである。

其無作妙用、殊勝功德、未レ易下以ニ算數ニ知上也(天目中峯和尚廣錄)

斯う云ふ風のものであるから、瀋王の初め起された所の本當の一念は、實に廣大無邊の一念である、斯う云ふやうに瀋王の補陀巖に參詣されたことを非常に讃嘆されて居る。今より四百四十年も前の事でありませぬ、今爰に鎮海觀世音菩薩の御供養に付て、殆ど是と同じやうな感が起ると思ふ。

今日は鎮海觀世音菩薩の開基であらせられる所の徳丸氏の七回忌であります、鎮海觀世音の供養を營み、尙それに因んで徳丸氏の七回忌、及び支那朝鮮に關係のある多くのお方々の供養をするといふ今日の發起人だけでも二百名もおありになるやうな大變な觀世音菩薩である。斯う云ふ立派な供養の勤まるのは、皆其供養を勤めた人が即ち觀音様におなりになるのである、斯う云ふ立派な事の出来るのは、どう云ふ事が因であるかと云へば、徳丸氏が北京に籠城して居られ、病氣の時に有がたいと感ぜられた其一念が今日に及んだのである、而も支那朝鮮に於て、非常に國家の爲に辛苦

艱難して歿くなつたお方々の英靈を慰めるといふ、立派な観音様の精神が茲に廣く行はれる事になつたのである、而も此會の組織を聞いて見ますれば、此観音様の信仰は支那でも朝鮮でも日本でも皆一つであるから、其信仰を以て日華兩國の親善を圖りたい、精神的親善を信仰上から圖つたら宜らうといふので、所謂東亞の關門なる鎮海灣に其觀音様をお祭りなさるといふ。さうして見ると徳丸氏の一念から起つた信仰の力が、幾百千人の團體となつて、多くの英靈を慰め、又多くの人の教化になり、それのみならず將來若も此會が、所謂日華兩國の精神上の親善を導く爲の一の立派な路案内となつた時分には、徳丸氏の觀音様を信仰なさつたといふ一念は、其人一人のものでなく、所謂東洋の平和が充分保たれる、東洋の平和の延びて世界の平和は因となる、して見れば實に此徳丸氏の一念の廣大無邊なることは、到底言語に絶して居る。今此に一番終にありました所の、其無作の妙用殊勝の功德算數を以て知り易からず、到底算數を以て知る事は出来ぬと天目中峯禪師の仰せになつた通り、此力を以てやつて參

りましたならば、何事をやつても此通りの大功德がある、それが今日お話した常德——常住の徳此常德といふのは、どう云ふ場合でも慈悲心を中心として、世中の爲になりたいと云ふ精神が何時でも浮んでそれが永久變らない所の力になつて來るのが即ち常德、十句觀音經の六句目にある常樂我淨の常の一字である。

大正九年十一月二十日印刷
大正九年十一月二十三日發行

非賣品

鎮海觀音會藏版

著作者 梶川乾堂

東京府下世田谷區 豪徳寺

鎮海觀音會代表者

發行者 森江英二

東京市本郷區奉天町二丁目二十一番地

終

